

ドサービス (NTT Ltd.) を組み合わせたフルスタックの DX 対応が実現できるようになった。例えば、以下のような提供形態が挙げられる。

- 企業向け大規模 SAP 導入: 業務アプリケーションを NTT データが開発し、クラウド基盤やネットワーク接続を NTT Ltd. が担当する。
- 海外拠点の WAN 最適化 + メインフレームレガシー刷新: NTT データののモダナイゼーションと NTT コミュニケーションズ由来の Arcstar サービスを組み合わせる。

このように IT と Connectivity を一体化させることで、従来は複数ベンダーへの分割発注が必要であった企業ニーズに一括で対応できる体制が整った (図表3-7-2)。

## (2) グローバルアカウント対応の迅速化

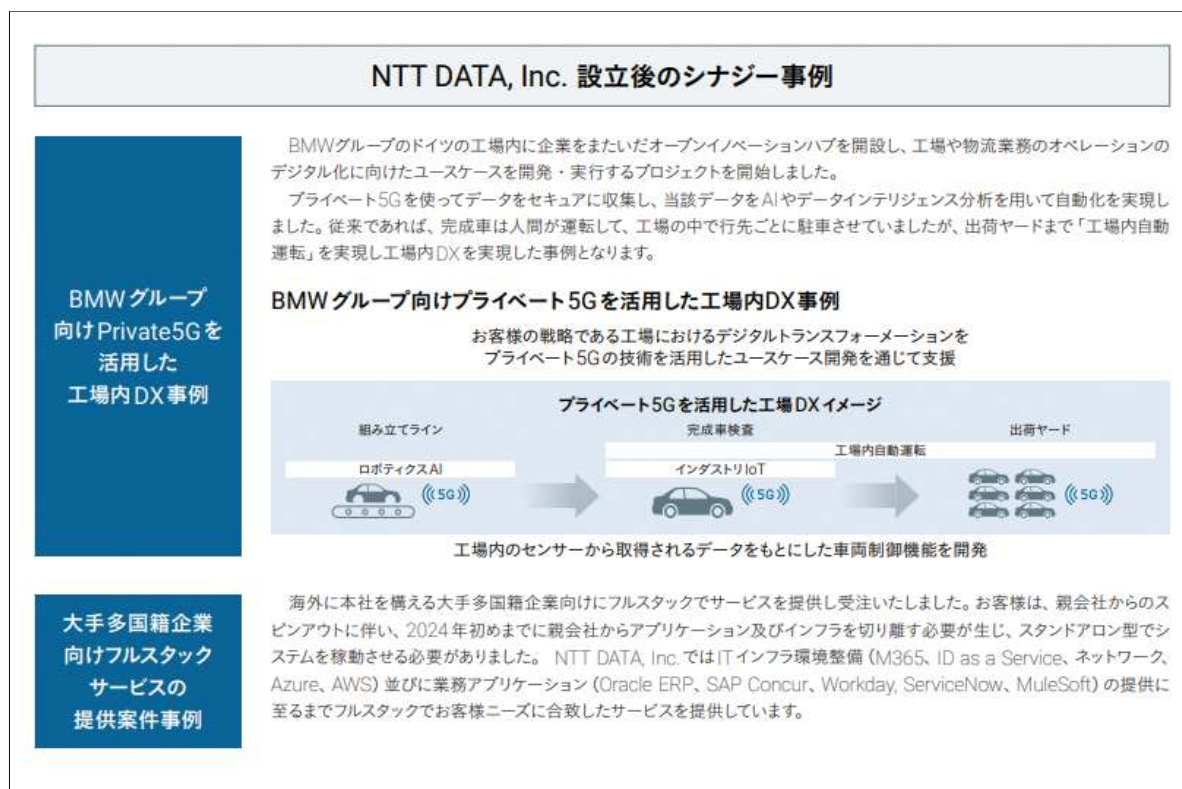
再編前は、例えば NTT データの海外法人が米国の顧客から受注しても、ネットワーク部分は NTT コミュニケーションズや Dimension Data と個別に連携が必要だった。再編後は NTT DATA, Inc. や NTT Ltd. を中心に組織横断チームを編成し、ワンストップでソリューションの提供が可能となった。特に欧米・アジア大手企業との大口契約では、アプリケーション、クラウド、マネージドネットワーク、サイバーセキュリティなど複数要素を一括提案できる点が競合との差別化要因となりつつある。

## (3) NTT データグループの完全子会社化におけるグローバル戦略上の意義

2025年5月にはNTTによるNTTデータグループ株式の公開買付け (TOB) が発表され、9月末に完全子会社化が完了した (TOBの詳細は第4章第1節6項参照)。同TOBは、2018年のNTT, Inc.、2019年のNTT Ltd.、2022年のNTT DATA, Inc. という一連の再編を進めてきた「IT (つくる力) × Connectivity (つなぐ力) の一体運営」を、資本面でも推し進め、NTTグループにおけるグローバル事業の重要性を一段と高めるものであった。

NTTグループのグローバル事業について、NTTの国際協力が始まる黎明期から、各社の事業立ち上げ、グループを挙げた大型M&A等、多くの挑戦の足跡を振り返ってきた。その過程でNTTグループは、組織再編やM&A、事業撤退も含めた大胆な意思決定を行い、今日のグローバル基盤を築き上げてきた。その歩みは、「リスクを取らなければグローバルでの飛躍はない」という実例を示してきたものといえる。今後も国ごとに異なる企業文化、規制、技術標準や投資リスクなど、海外では想定外の障壁に直面することもあるだろう。それでもチャレンジを重ねることで、NTTグループは世界にイノベーションと価値創造を提供し続けていく。

図表3-7-2 ▶ 海外事業組織再編成後のシナジー事例



出所：NTTデータ『統合レポート2023』